講演「これからの小学校外国語教育」（大妻女子大学教授、服部孝彦博士）

小学校外国語活動の目標は(1) 外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深める、(2) 外国語を通じて、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図る。
(3) 外国語を通じて、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませる、である。これは要するに日本語とは異なる外国語の発音とリズムに慣れ、外国語を実際に使ったコミュニケーション活動を体験し、知識偏重ではないコミュニケーション能力を育成するということである。

児童のコミュニケーション能力を育成する場合、コミュニケーション能力とはどのような能力であるかを教員は理解していなければならない。コミュニケーション能力理論によると、コミュニケーション能力は、いくつかの構成要素に分けることができる。現在最も新しいといわれているコミュニケーション能力に関する理論は、バックマンとその共同研究者のパーマーという学者たちのものである。しかし、この理論はやや複雑でわかりにくいところがあるので、ここでは語学教育に関わる人達に最もよく知られ、また比較的わかりやすいカナルという学者のものを使って説明することにする。それはコミュニケーション能力の解明はカナルの理論が発表された後も進んだが、コミュニケーション能力の構成要素そのものは、カナルの理論と大きく変わっていないからである。

カナルによればコミュニケーション能力は (1) grammatical competence、(2) sociolinguistic competence、(3) discourse competence、(4) strategic competence の４つの構成要素に分けることができる。この 4 つの構成要素を日本語にすると(1)文法的能力、(2)社会言語学的能力、(3)ディスコース能力、(4)方略的能力となる。

この４つの要素でまず注目したいのは (1) の文法的能力と (2) の社会言語学的能力である。日本人が学校の英語の時間に学んだのは、主に文法的能力である。文法的能力とは、語彙、語形成、文形成、発音、綴りなどが含まれ、文字通りの意味を正確に理解し表現するための能力のことである。しかし、実際のコミュニケーションの場面では、文字通りの意味の理解や表現をする文法的能力だけでは不十分だ。社会言語学的能力、すなわち言語を使う時の規則の知識も身につける必要がある。例をみてみることにする。

もう 10 年前になるが、カナダのバンクーバーで開かれた国際学会の研究発表の会場で次のような出来事があった。発表を聞いていた一人の日本人研究者が発表者であるアメリカ人の研究者に向かって“I can’t agree with you.”と言って反論を始めたのだ。会場にいただれもが、この日本人研究者がひどく失礼な人であると感じた。それはこの日本人が、発表中に手をあげて反論したからではない。失礼だと感じたのはその言い方である。“I can’t agree with you.”はあまりにも直接的すぎる。

日本人の中には欧米人は yes と no をはっきりさせズバリものを言う人たちなので、直

接的な表現を使ってもかまわないと本気で考えている人がいるようだ。しかし、人間だれしも、直接的に否定されては傷つくのは当たり前である。まず相手の立場を受け入れることからはじめるべきだ。“What you say might be true, but ～” や、“I understand what you mean, however, ～” と言った上で、反論をすればよいわけである。もっと丁寧にするには、but や however の後に、 I'm afraid という衝撃をさらにやわらげる役割をはたすことばを入れればなおよいといえる。

この例にあげた日本人研究者は、英語の文法的能力は身についていたが、残念ながら英語を使用するときの規則の知識である社会語学的能力が不十分であったわけである。文法的に正しくても社会的文脈、すなわち話している相手や場によって容認されない表現もある。

次に(3)のディスコース能力について考えてみる。ディスコース能力とは、意味のある全体を組み立てられる能力のことだ。文の単位をこえ、話の内容に一貫性や結束性を持たせることができる能力である。具体例をみてみよう。

次の英文は、日本人の中学１年生が書いた１つのパラグラフからなる英作文である。

I have a grandmother. She is very kind. She is sixty-three years old. I like her. She is very busy. Her name is Chizu. She lives in Takada.

この英文は、文法的能力の観点から見れば、中学一年生としてはよく書けているといえる。しかし、これをディスコース能力の観点からみるとどうであろうか。

まず英語のパラグラフと日本語の段落の違いから考えてみよう。英語のパラグラフは日本語では段落と訳されるが、paragraph =「段落」ではない。英語のパラグラフには、日本語の段落に比べると、はるかに整然とした定義がある。

パラグラフは、主題をもって統一された文の集合体で、ひとつのまとまりのある思想を表している。パラグラフは主題文ではじまり、主題文で述べられた主題をサポートする支持文が続き、多くの場合は結論文が最後にくる。もちろん１つ１つのパラグラフに結論文は必ず必要というわけではない。

例で示された中学１年生の書いたパラグラフを分析してみよう。最初の文は「私には祖母がいる」という内容で、主題文からはじまっている。そしてそれに続く文は主題である「おばあさん」についての支持文なので、内容の一貫性はある。ただし主題の展開法及び文と文との結束性はかなり問題がある。

主題文で「おばあさん」のことを主題にしたので、支持文では「おばあさん」について

の重要な情報から順に述べる必要がある。従って、主題文の次に来る文としては Her name is Chizu. が適切であろう。3 番目は「おばあさん」の年齢を述べている She is sixty-three years old. がくるのがよいと考えられる。

文と文との結束性についてはどうであろうか。2 番目の文の She is very kind. と 3 番目の She is sixty-three years old. との間に文が 2〜3 抜けているのではないであろうか。というのは She is very kind. の次に来る文は「おばあさん」が親切な人だといえる例を示す必要があるからだ。4 番目の文 I like her. に続く文としては、自分がなぜ「おばあさん」が好きなのかの理由を述べなくてはいけない。5 番目の文 She is very busy. の後には、「おばあさん」が何をして忙しいのかの例、またはなぜ忙しいかの理由などを述べる必要がある。以上のようにこの英作文は文法的能力の観点からはなんら問題のないものであるが、ディスコース能力の観点からは決してよい作文とはいえない。

これまで文法的能力、社会言語学的能力、ディスコース能力について述べてきたので、次に方略的能力について考えてみることにする。方略的能力は文法的能力、社会言語学的能力及びディスコース能力の 3 つの能力を補助している能力である。具体的な例としては、ことばで上手に表現できない時にジェスチャーを使うなどをあげることができる。小学校外国語活動の目標の 1 つである「外国語を通じて、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度」も方略的能力に含まれるといえよう。

講演では理論の講義と同時に参加型のワークショップ形式の演習を通して理論に基づいたコミュニケーション能力を育成する具体的な指導法を学んだ。これらについては服部孝彦博士の著書『話せる・聞ける英語のリズム感』(アルク)及び『Speak Easy』(メディアイランド)に詳しい内容が書かれているので、これらの本を参照されたい。